～大切なのはテクニック？　バランス？　スタイル？～

名作に学ぶ原稿の書き方　基本のき＆ポイント

『仙人』　芥川龍之介

【あらすじ】
仙人になりたいという奉公人・権助。それにつけこみ医者夫婦は「20年後、仙人になる術を教える」と、ただ働きをさせる。20年後、仙人になる術などもともと知らない夫婦にはある案が。狡猾な女房に庭の松の木に登るよう言いつけられ、権助が言われたとおりにすると……。
（新潮文庫/『蜘蛛の糸・杜子春』に収録）

①権助は口入れ屋の暖簾をくぐると、煙管を咥えていた番頭に、こう口の世話を頼みました。
「番頭さん、私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい」
①番頭は呆気にとられたように、暫くは口も利かずにいました。
「番頭さん、聞えませんか？　②私は仙人になりたいのだから、そう云う所へ住みこませて下さい」
「まことに御気の毒様ですが、――」

が、とうとう二十年たつと、③権助は又来た時のように、紋附の羽織をひっかけながら、主人夫婦の前へ出ました。そうして慇懃に二十年間、世話になった礼を述べました。
「就いては兼ね兼ね御約束の通り、今日は一つ私にも、不老不死になる仙人の術を教えて貰いたいと思いますが」

①人称・視点の統一

この小説は、三人称で書かれている。三人称のスタイルはいくつかあるが、これは語り手が離れた位置から登場人物を眺め、話を進めるスタイルだ。

②説明は会話で自然に

会話文に説明的要素が入っているため、権助について読み手が自然に知ることができる。また、権助が同じ言葉を繰り返すことによって、仙人になりたい本気度が伝わり、物語後半の権助の行動への布石になっている。

③あとで利いてくるモチーフの提示

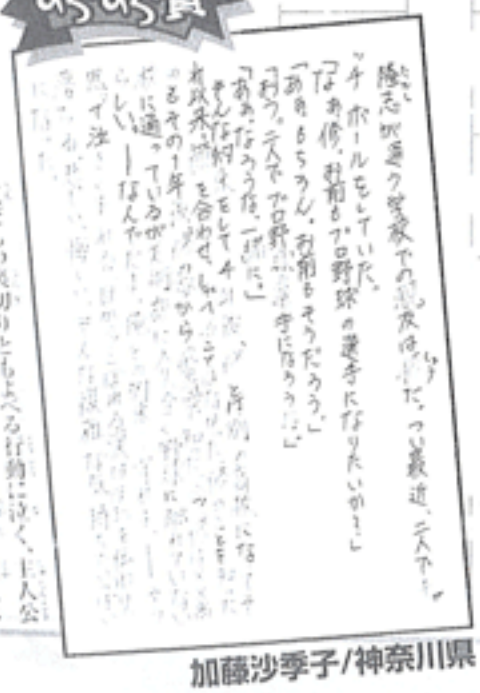
権助が着ている「羽織」。この羽織は物語ラスト、権助が松の木を登る場面で生きてくるモチーフ。普通に何気なく着ているようだが、意味があり重要な小道具となっている。

万年筆先生の文学さらさらメモ

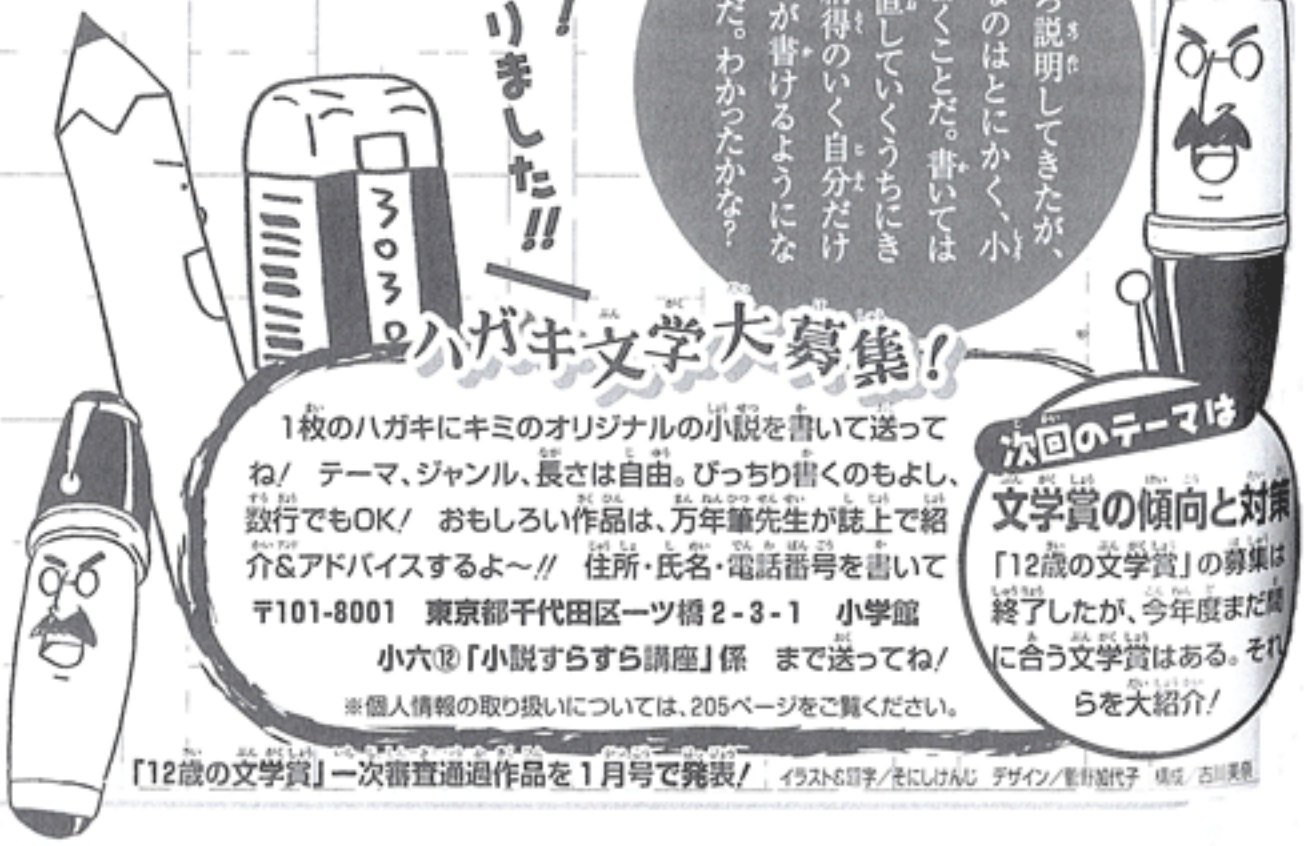
「村上春樹が受賞するか？」と海外メディアで話題となった今年のノーベル文学賞。結果はトルコの作家、オルハン・パムク（51）が受賞。村上は惜しくも受賞を逃した。同賞の賞金はナント1000万クローナ（約1億6200万円）と破格。世界にファンがいる村上、いずれ受賞となるか？

ハガキ文学大発表！

今月のすらすら賞



加藤沙季子/神奈川県



ハガキ文学大募集！

1枚のハガキにキミのオリジナルの小説を書いて送ってね！　テーマ、ジャンル、長さは自由。びっちり書くのもよし、数行でもOK！　おもしろい作品は、万年筆先生が誌上で紹介&アドバイスするよ～!!　住所・氏名・電話番号を書いて

〒101-8001　東京都千代田区一ツ橋2-3-1　小学館
小六⑫「小説すらすら講座」係　まで送ってね！

※個人情報の取り扱いについては、205ページをご覧ください。

次回のテーマは
文学賞の傾向と対策
「12歳の文学賞」の募集は終了したが、今年度まだ間に合う文学賞はある。それらを大紹介！

「12歳の文学賞」一次審査通過作品を1月号で発表！

イラスト&題字/そにしけんじ　デザイン/星野美代子　構成/吉川美穂